

令和5年12月21日「地域福祉推進会議」議事要録	
開催日時	令和5年12月21日（木）午後1時30分から午後3時30分まで
開催場所	奈良市役所北棟2階202会議室
議題	地域福祉推進会議
出席者	委員 山下委員、今西委員、作間委員、植畑委員、西村委員、森山委員、安井委員、木村委員、田中委員、若野委員、安藤委員、國分委員、福本委員、中川委員 【委員17名中14名出席】
	事務局 【福祉部】福祉部長、福祉部次長、福祉部参事、福祉政策課課長、障がい福祉課課長、長寿福祉課課長 他 【奈良市社会福祉協議会】1名
開催形態	公開（傍聴4名）
担当課	福祉部福祉政策課
議事の内容	
1 開会	
2 議題 (1) 第4次奈良市地域福祉計画の進捗状況の報告について (2) 奈良市老人福祉センターの今後の在り方について	
〔質疑・意見の要旨〕	
<p>（各課進捗管理について）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまでの取り組みに対する評価というのは、各課の自己評価なのであまり意識せず見たら良いと思う。評価は、数的な評価と質的な評価の両面から見ていかないとはいけませんが、このことがちょっと分かりにくいので、これは年度末までにもう一度考えていく必要がある。具体的な市民の姿が見えにくいので、対象者が見えてくるような典型的な事例というものを共有する必要がある。 ・どれくらいの人がどれくらいの訪問があったり、どれくらいの人にリーチアウトしたというような数字がかかっているところもあったので、その部分は少しイメージが湧きやすいと思った。 ・新しいことを始める時に推定でストップをかけるのではなく、行政の枠組みの中に組み込み上手く使っていくなど、新しいことも方向性を合わせながら進めていけば良いのではないか。 	
<p>（つながりプロジェクトについて）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コロナになってから今までしてきたことが出来なくなり、コロナ後は今までにはなかったことをしなければならなくなった。地区ごとに特色があるので、地区社協が色々考えて、それぞれの地域に合った活動を行ってきた。それぞれ地域に興じたものが根付くにはまだまだ時間がかかると思うが、それぞれの地域で考えた事業だからこそ、必ずそこに根付いていくと思うので、これから楽しみにしている。 	

・普段からの付き合い、交流、見守り、これは地域のアクションとして望ましい。その次に、相談・助け合いが大事になる。

・つながりプロジェクト内のなんでも相談事業の中で、相談を受けた側がパニックのようになってしまって、そこから抜け出せなくなってしまうことがある。ギリギリの状態の方が来られることが多いので、そういうところを受け止め早期解決できるような窓口を計画の中でぜひ進めていけたらと思う。

(避難行動要支援者名簿について)

・避難行動要支援者名簿は大切なものにも関わらず、多くの煩雑な手続きにより地域になかなか浸透しなかったが、担当が福祉政策課に代わってから、ひとつずつ問題点を解消していることで協力してくれる地域も増えてきた。今後災害時支援体制の構築が充実していくよう地域で協力していきたい。

・普段から付き合いが無かったら、名簿だけで動けるわけではないので、そういうところの擦り合わせの難しさというのを改めて感じた。

・自治会は非自治会員さんには関わることができないということで動きにくいことがあったが、自主防災防犯協議会は非会員もちゃんと見ることになっている。地域がサポートしていく時代が来ているので、避難行動要支援者名簿に関しては、来年からは対応は出来てくると思われる。

・計画に載せたことを具体化していくことの難しさを感じる。これだけ計画で各課が挙げているものが、有効、合理的に機能していくかどうかというところを考えるとちょっと心許ない。ただ地区社協さんが作ってくれた活動資料集等に、地域福祉の活動の中身が現れてくる。さらにここから相談支援の方に展開できると望ましい。

・若者世代のひきこもりの方でいうと、福祉の制度というものは敷居が高すぎて相談できない。軽い感じで立ち寄れるところで、ネット感覚のライト的につながるが多くなっている。

・奈良市内の13の地域包括支援センターや基幹型地域包括支援センターの協力もあり、一緒に寄り添いましょう、考えましょう、というかたちの相談を行うことが出来ている。最近はしみんだよりやインターネットを見て相談に来られる方も多し。障害や認知症のことなどを我が事と思っていただくことでより理解が進むと思う。

・行政がプラットフォームを作って、そこで活動できる人たちが社会的に広がってほしい。新しい形を受け止めて、地域と上手く合致するのが望ましい。

・コロナ禍でかなり停滞していた時期もあったが、奈良市全体を見て、良い方向へと進んでいると感心している。ただ、市も県も国も子どもと言っているが、高齢者、障がい者について、これからどういう風にするのかと疑問に思っている。

・認知症カフェは専門的な知識がある方がいないと全体の雰囲気を取り仕切るのはなかなか難しく、やみくもに開けばいいというわけではない。本人がほっとして喋れる所があったらいい。

・災害関連で医療面も様々な役割を果たさないといけない。災害時に水や電気が止まったから供給できないとなると命の綱が切れてしまう方もいるので、対策をしていく必要がある。災害時に医師もどの地域で誰がどのくらい被災したかを瞬時に把握して、出来る援護のレベルをきっちり区分けする必要がある。

(福祉センターについて)

・福祉政策の重層の話より、奈良市老人福祉センターの今後の在り方についてのほうが具体化している。福祉センターの利用者が激減している理由は、市民の生活構造として分析しないといけない。高齢者の場合は引きこもりが結構増えている。センターの他にも、楽しめる選択できる人は良いが、センターがそういう場所になっていないというのは、大きな反省だ。

・高齢者は足が不自由。センターを交通に便利なところに建てるか、センターの前にバスが止まればいい。

・福祉センターで、魅力的なものを考えなければならない。高齢者の方を引き付けるようなものをこれから取り上げていかなければ、皆さんの足は遠のいていくのではないかと思う。

(ななまるカードについて)

・通院などでも、ななまるカードを使っておられる方が多い。また、トランジットカードを発券して繋いであげると、活動範囲がもっと広がるのではないか。また、距離が遠いではなく、バス路線の関係で、近いけどすぐ乗り換えないといけないなどの問題点も工夫したら良い。デジタルデバイス対策では、そういうものを貸し出すような形で、家で持ってもらうと、センターと一つで結べば、センターをたくさん作っておかなくても良いかもしれない。デジタルデバイスの活用によって利用者の数を減らすことも可能ではないか。

・ななまるカードの使い道は、日常の足。特別の行事ではなく、本当にななまるカードがなかったら出ていかない。ますます引きこもりが増える。

・高齢の方はお風呂楽しみにしている。一番底辺のしんどい人を救う。高齢者も障がい者も一緒に、しんどい人を救う事が福祉行政の在り方だと思う。そこを頭に入れて、いろんな資料作りや交渉をして欲しい。奈良市のオピニオンリーダーとして、恥ずかしくない事を市長にやってほしいと本気で思う。

・総合福祉センターでイベントやった時、一番要望が多かったのはお風呂とプールの再開。いざというときに助けがあることが安心に繋がる。再開して欲しい

・障がい者福祉の底を抜くようなことはしてはいけないと、市長に訴えたい。お風呂の利用者はコロナの前まで八万人くらい続いている。もうちょっと現状と、将来の奈良市の市民生活を踏まえるべきである。

・今の老人センターの福祉の機能はだいぶ薄くなっている。そこを見直す際に、困っている、弱い人を見落とさないことを分かった上で、今後を考えるべき。いわゆる障がい

者と健常者、老人と若い人が一緒に交流、交流とそれから徹底的に弱者を救済することを念頭に、施策をもう一度点検し直して頂きたい。また、アウトリーチという思想はないのか。総合福祉センターの発想があったが、そここの四センターの役割分担など、そういう発想が欲しい。それから、事業進捗確認シートを見た時、順調と書けている背景にある数字が気になる。もう少し客観化させてほしい。また、これからの福祉人材をどういう風に引っ張り出してくるのかを施策科目としておこすべきじゃないか。

【委員長によるまとめ】

・議案としては漠然としていて難しいけども、とてもいい議論ができた。新しい関係性の作り方も考えていきながらも、一番厳しいところにある人を見過ごしてはならない。効率だけで物事を考えないようにするべき。